

日本語アクセントの史的変化の 研究方法について

マレク・サルガルスキ

1. はじめに

現在、日本語のアクセントについての研究は非常に進んでいる。西欧の言語学、特に比較言語学の方法を使うことによって日本語のアクセントがどうなっているか明らかにされている。さらに、金田一春彦氏、小松英雄氏、桜井茂治氏等の研究によって過去の日本語のアクセント体系も再構成され、日本語のアクセントがどのように変わってきたか明らかになった。

アクセントの研究は重要である。これが分かれば、日本語の色々な問題の解決が可能になるからである。例えば、アクセントの型から単語の語源が推定できる。それによって、文献、資料の解説もさらに確かなものになり得る。また、平安時代以降各時代の日本語のアクセント体系が明らかになり、それぞれの時代に編まれた文献の解説にこれらの知識が役立つ。

それでは、アクセントの研究にどんな方法、どんな資料あるか紹介してみたい。

2. アクセントとは

先ず、アクセントが何であるか見てみよう。『国語学大辞典』の説明は、次のようになっている。

「個の語句について、社会的慣習として決っている相対的な際立たしきの配置」

この〈際立たしき〉は言語によって強弱と高低があるが、金田一春彦氏は日本語のアクセントについて、次のように定義している。

「一つ一つの語句にについできまっている高低の配置」

つまり、日本語の場合、アクセントの際立たしきは高低である。实例を上げよう。「春」とか「秋」という単語の第一音節は標準語では必ず高く唱えられ、第二音節は低く唱えられる。こういう唱え方が標準語、つまり東京方言では正しいとされ、標準語を使っている人はそのようにこの二つの単語を発音する。

アクセントは単語の形態に結び付いている。一つの単語のアクセントとその単語の意味、形態との関係は恣意的である。なぜある社会の人々が皆同じようにアクセントを付けるの

(2)

かという、アクセントもひとつの社会習慣だからである。

社会習慣が時代とともに変遷するように、アクセントも、社会習慣として変っていく。時代から時代へのアクセントの変化、これがアクセント史研究の対象である。

3. 日本語のアクセントの特徴

日本語のアクセントの体系がどんなものであるか見てみよう。日本語の諸方言のアクセントの比較から、次のような共通点が見付かっている。

- ①一つの音節は低いか、高いかである。つまり二つの抑揚で唱えられるだけで、単語のアクセント（アクセントの型）はこの二つの調素の組み合わせから出来ている。広東語などには「高」と「低」の他に「中」の抑揚があるが、日本語にそういうものはない。
- ②一つの音節内では原則として抑揚は変らない。つまり一つの音節はいつも平らで、高さの変化は一つの音節から次の音節へ移る境目に起こる。（京都・大阪方言には一つの音節内で抑揚が変る場合があるが、それは珍しく、現れる環境も限られている）
- ③一つの単語内で「高」になる部分はただ一つの音節か、連続している幾つかの音節かであって、二カ所に別れて存在することは少ない。つまり●○●とか●○●●とか●○●○とかというようなアクセントの型はあまりない（●の記号は高く唱えられる音節、○は低く唱えられる音節を表わす。以下も同じ）
- ④長い単語（四音節以上）の場合、「高」の部分は単語の前半にあるという傾向が強い。
- ⑤各方言のアクセント体系に「相対的な型不在の規則」がある。つまり、例えば、●○●○型と、その逆である○●●型が同じ方言に共存することまずない。また○●●●型があれば、その逆の●○○○型は同じ方言にあまり見られない。
- ⑥単語が複合語の要素になった場合、その単語のアクセントが変ることがある。例えば、東京方言では「赤い」という形容詞は○●●という風に発音され、「おもちゃ」という名詞は○●○という風に発音される。しかし、「赤いおもちゃ」という単語の結合では○●●●○という風に発音される。つまり、単独の「おもちゃ」の○●○型が「赤い」という形容詞と結びつく場合には●●○型に変わるのである。

①②③④の特徴からみて、各方言にいわゆる〈アクセントの核〉という現象が起こりやすい。単語の頭が高く唱えられ、何番目か後の音節の音が下がるという現象である。それは日本語のアクセントに独特なものである。はっきりした〈核〉を持っているアクセントの型は強く、固定しており、変化しにくいようだ。一方、〈核〉を持っていない型や一つの音節内で音の高さが変わる型は固定しておらず、時代とともに変わりやすい。

以上の特徴は各方言にほぼ一様に見られ、日本語のアクセント体系の性格の典型的要素

である。このように、日本語のアクセントの歴史的変化の方向を理解させてくれるので、日本語のアクセントの史的研究は重要である。

4. アクセントの語類

次に、日本語のアクセントの歴史的変化の意味を理解させ、アクセントの研究をもっと簡単にしてくれるのは、いわゆる〈アクセントの語類〉についての知識である。〈アクセントの語類〉が何であるか見てみよう。普通、次のように説明される。

意味的にも、語源的にも全然関係のない単語の群がA方言において同じようなアクセントの型で発音されるとしよう。すると、その群の単語はB方言においても皆そろって同じように発音される。さらに、こういう群に属する単語はどこの方言においても、皆そろって同じように発音されるのである。こういう群は〈アクセントの語類〉と言われる。そして、方言によってアクセントが違っているといても、語の一つ一つがばらばらに異なるのではなく、ほぼ規則的に類ごとにまとまって異なっている。例として、二音節の名詞が色んな方言でどのようなアクセントの型になっているか見てみよう。

表1.

	道	庭	箱	石	村	雪	足	犬	草	海	糸	中	秋	声	春
東京	○	○	○	○	○	○	○	○	○	●	●	●	●	●	●
京都	●	●	●	●	●	●	●	●	●	○	○	○	○	○	○
鹿児島	●	●	●	●	●	●	○	○	○	○	○	○	○	○	○

表1)を見ると、道、庭、箱、三つの単語は、東京では皆そろって○●、京都では皆●●、というアクセントの型になっており、どの方言でもその三つの単語のアクセント型は同じである。これらの単語は同じアクセントの語類に属しているということになる。石、村、雪の三つの単語は別の語類に属している。「石」、「村」のアクセントは、東京では「道」とか「庭」と同じ型をしているが、京都方言では「道」、「庭」のアクセントと違っているからである。現代の日本語アクセントの研究において、すべての言葉は先ず品詞に

(4)

よって区別され、更に音節数、アクセントの語類所属に分けられている。以上の単語は皆二拍名詞で、「道」「庭」「箱」は二拍名詞の第一語類に属し、「石」「村」「雪」は第二類、「足」「犬」「草」は第三、「海」「糸」「中」は第四類、「秋」「声」「春」は二拍名詞のアクセントの第五語類に属している。Aという言葉が二拍名詞で、アクセントの第二語類に属しているというのは、東京、名古屋、広島、大分などで○●のアクセント型をし、京都、大阪、高知などで●○のアクセント型をするという意味である。現在一つの単語のアクセント語類をはっきりさせるには、東京と京都と鹿児島の方を比較すれば充分である。「全国アクセント辞典」は各見出し語に、この三つの方言においてどのようなアクセントが付けられているかを説明しているので、アクセント語類を知ることができる。

アクセントの語類の知識は日本語のアクセントの変遷の研究において非常に大切で、とても役に立っている。アクセントが記録されている過去の文献の分析によって、アクセント語類の所属が時代を経ても変わらないものであるということが明らかにされているからである。つまり、現代においてアクセント第一類に属している語は江戸時代にも、鎌倉時代にも、平安時代にも、皆揃って同じ語類に属していたのであり、日本語のアクセントの歴史的变化は一つ一つの単語のアクセントの移り変りではなく、語類全体のアクセント型の変化なのである。そこで、ある単語のある時代におけるアクセント価を推定する場合、その単語について直接つきとめができなくても、現在同じ類に属している他の単語のその時代のアクセントが分かれば、その単語のアクセントを推定することができる。このようなことは、日本語のアクセントの史的研究にとって大きな光明となっている。

5. 過去のアクセントの研究方法

私達は過去の時代のアクセントを自分の耳で直接聞くことが出来ない。だから、色々な方法で間接的に過去のアクセントを推量するしかない。過去のアクセントの研究には次のような資料を利用することになる。

- 1) 現在の各方言におけるアクセント
- 2) 現在残っている過去の文献
- 3) 私達が現在接するもののなかの、何らかの意味で過去のアクセントを反映しているもの

さて、それぞれの資料について簡単に述べてみよう。

6. 現在の諸方言のアクセント

十九世紀の後半に、ヨーロッパでは印欧語族の研究が盛んになり、その成果として比較言語学というものが生れた。比較言語学の柱となる仮説は、印欧言語は皆元々一つの言語であって、その後時間がたつにつれて、多数の言語に別れてきたというものである。だから、現在の様々な印欧言語において、文法的、音声的な対応と類似があるのであり、現在の印欧言語の比較によって祖語を再構成出来るし、その起源となる言語から、現在の段階への移り変わりの方向も推定できると考える。

二十世紀に入ると、印欧語族以外の言語も、比較言語学の方法で研究されるようになった。現在の中国語の諸方言の比較によって昔の中国語の音韻体系（中古音）を推定したスウェーデンの B. Karlgren 氏の研究などがその一例である。

日本語の諸方言については次のように推定されている。

- A) 日本語諸方言は以前は同一のアクセントをもった言語体系であった。
- B) 現在の諸方言において、同じアクセントの語類に属する語彙は、本来同じアクセントを持っていた。
- C) 違う語類に属する語彙は違うアクセントを持っていた。
- D) 元にあった日本語のアクセント体系が色々な過程を経て、現在の方言のアクセント体系に別れたが、これらの語彙は語類ごとにまとまって変化していた。

A) B) C) D) からみて、日本語の過去のアクセントを研究するには、現在の諸方言のアクセントを資料として、比較言語学の方法を採るのが適切である。

諸方言のアクセントを資料にして、過去のアクセントを推定するにしても、色々な場合がある。

- 1) 非常によく似たアクセント内容を持った二つの方言にアクセントが一致しない語彙がある場合。例えば、東京語と八王子方言とは、型の種類は完全に一致するが、小数の語彙についてのみ相違がみられる。このような二つの方言では、現在異なる型に属する語彙が古い時代には同じ型に属していたであろうと推定していいと思われる。その場合、一方で変化した事情が明らかになれば、いずれが古い形かを推定出来ると考えられる。
- 2) 〈言語地理学〉、〈方言地理学〉の方法を応用して、アクセントの地理的分布から、古い形、新しい形を推定することが出来るはずである。例えば、ある地域の中心部にはB、周辺部にはAというように、アクセントの違いがある場合に、周辺のAの方を一応古いと考え、中心部のBの方は新しいと推定することができる。
- 3) 型の対応の原理が応用できる場合。現在の諸方言において、同じアクセントの語類に

属する語は、同じ方言体系の中では、同じ型に発音されるべきもので、異なる語類に属する語は、少なくとも以前は異なる型に発音されていたと考えられる。だから、もしある方言体系で、ある類に属する語が一般にA型で発音されていながら、その中の一部の語が例外的にBの型で発音されているというような場合には、〈その方言においてAの型が以前存在し、Bの型は新しく出来た型ではないか〉と思える。

現在、諸方言のアクセントが日本語アクセントの研究における基礎的な資料である。その資料によって、日本語のアクセントの全体的な性格とアクセントの移り変わりの方向を調べることが出来る。私達が方言のアクセントを実際に耳で聞けるというのが、この資料の強みである。

7. 過去の文献

現在の諸方言のアクセントは日本語アクセントの史的研究において、とても重要な資料であるが、それに基づいて過去の時代のアクセント体系を推定しても、それがはたしてどの時代のアクセントなのかとか、推定されたアクセント体系が確実であるかなどの問題がいまだ残る。そういう疑問を説くのに、過去のアクセントを記録した文献が非常に役に立つ。アクセントを記録した文献の中にどんなものがあるか見てみよう。

橋本進吉氏は、『国語音韻史』の中で、日本語の音韻の歴史を研究する資料として、二種類のを区別した。一つは過去の音韻について記述したもの、二つ目は過去の音韻によって表記したものである。金田一春彦氏の『国語アクセントの史的研究』によると、アクセントの歴史の資料にも、この二種類があるはずである。一つはアクセントについて記述した文献、今で言えば、「東京語で〈春〉という言葉の最初の音節は高く発音され、次の音節は低く発音されている」と言うような事を述べたものである。もう一つの文献はアクセントを註記した文献である。例えば、「○」、「●」の記号を使って、東京語を記述すると、「春-ハル-●○」と言う風にアクセントを註記したものである。過去のアクセントの註記・記述が載った文献をもっと詳しく種類分けしてみると、次のように区別出来る。

A) アクセントについての記述が載った文献

- ① 四声による記述が載った文献
- ② 術語「声」による記述が載った文献
- ③ 具体的高低の記述が載った文献

B) アクセントを註記した文献

- ① 平上去の文字の註記の載った文献
- ② 声点の註記が載った文献

③音譜の註記が載った文献

④アクセントによる文字の使い分けられた文献

日本人はもともと自分の言葉のアクセントは意識していなかったのであろう。初めてアクセントを意識したのは、多分、大昔、中国との交流で中国語を勉強しはじめた時であろう。アクセントの機能は、中国語においては非常に大切に、中国にはアクセントについての研究が以前から盛んであった。日本人は中国語のアクセントを習い、昔の中国のアクセントについての知識も身に付けていたようだ。その後、この知識を使って、日本語のアクセントも記述していた。だから、過去の日本語のアクセントを記述した文献の中で代表的なものは、中国語のアクセントである〈四声〉、すなわち、〈平声〉〈上声〉〈去声〉〈入声〉を全部使い、日本語の発音を解説した文献である。この四声が具体的にどのような音価を表していたのか、これを明らかにしなければならない。

平安時代に日本人が学んだ四音の内容は次のようなものであったろう。〈平声〉は低い平らな音調、〈上声〉は高い平らな音調、〈去声〉は〈低〉から〈高〉へ上昇する音調、〈入声〉は拍の末に-p, -t, -kの子音を伴った低い平らな音調であった。平安時代の半ばごろ、それぞれの〈声〉がさらに〈軽〉と〈重〉に分けられていたが、院政時代以後、上声の重は去声の重に似ていたため、それに紛れ、さらに去声の軽は上声と混同してしまった。残ったのは(1)平声の軽、(2)平声の重、(3)上声の軽、(4)去声の重、(5)入声の軽、(6)入声の重の六声であった。このうち平声の重は、本来の平声で低平調、平の軽は高から低への下降調として落ち着いた。また入声の重は、本来の入声で低く平ら、入声の軽の方は高く平らな-p, -t, -kを伴う音となった。

さて、アクセントについて述べた文献の種類について述べ、実例をあげてみよう。

- A 1) この文献は、日本語の単語全体の発音、あるいは単語の一つ一つの拍を四声の一つにあてて、その単語のアクセントを説明したものである。例えば、中世の源氏物語辞典である長慶院の『仙源抄』の奥書きにこのような記述がある。

いろはをつねによむやうに声をさぐらば、「お」文字は去声なるべし。定家が「お」文字つかふべき事を書くに、「山のおく」と書けり。まことに去声とおぼゆるを、「おく山」とうちかへしていへば、去声にはよまれず、上声に転ずる也。「おしむ」「おもひ」「おほかた」「おぎの葉」「おどろく」など書けり。これはみな去声にあらず。

これは和語の単語の一つの拍を中国語の四声の一つ一つにあてて説明しているもので、この種類の代表的な文献である。

(8)

A 2) 日本人は、中国の「四声」を学び、日本語のアクセントの存在に気付いたが、それ以来アクセントを表す術語として「声」と言う語を用いた。そういうわけで、日本語の単語の発音を「声」という術語で述べた文献が出てくる。

例えば、藤原顯昭の『袖中抄』のなかにこういう記述がある。

声と義よの相違常事也。「大原」と「おほはら野」と相違せり。「かも河」と「賀茂」と相違、「いなり山」「いなり」と相違、「かすが山」と「かすが」と相違、或はかみにひかれ、或はしもにひかれて、便によりて声は不定也。

A 3) この文献は一つ一つの語について、この語はどこが低いとか、どこが高いとかいう事を具体的に述べたものである。例えば、文雄の『和字大観抄』にこういう記述がある。

「端」といふは、何のくせもなく、平かに和ぎ出づる声なり。それを平と云ふ。「橋」といふは声強く、はげしき故にひづみてのぼるなり。それを上と云ふ。

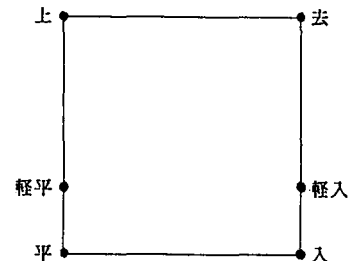
以上述べた文献は、アクセントについて記述した文献である。次に、日本語アクセントを註記した文献について述べよう。

B 1) 「平」「上」「去」「入」という文字を本文の文字の下、又は脇に註記したものがあ。その代表的なのは『古事記』の

宇比地爾_上神 須比地爾_去神

の様に、万葉仮名の所々に「上」または「去」と小さく註記している。

B 2) 次に、文字の肩や裾などに〈声点〉という小さな点または線を施した文献である。声点はその文字の四声を示す点で、図のように、もし文字の左裾にあればその文字は平声、左肩にあればその文字は上声、右の肩にあればその文字は去声、右裾にあればその文字は入声に発音するべきことを意味する。文献によって左中位、または右中位の少し下がった所に声点があり、それは軽平声



と軽入声を表す声点である。声点のある文献の代表的なものは、院政時代の『類聚名義抄』、『色葉辞類抄』、平安時代初期の『金光明最勝王経音義』、『日本書紀』や『古今和歌集』の古写本などである。

B3) 日本語のアクセントは音の高低変化であることで音楽の旋律と似ている。日本には古くから歌の旋律を表す音譜があった。しかも、そういう音譜によって日本語の単語のアクセントを註記した文献も幾つかある。その中には釈観応の『補忘記』金春禅鳳の『毛端私珍抄』、富士谷成章の『稿本あゆひ抄』などがある。

B4) 次に、アクセントを記載した文献として、アクセントによる文字を使い分けた物がある。先ず、藤原定家の仮名遣いで書かれた文献においてだが、すべて、「お」の文字は平声用に用いられ、「を」の文字は上声を表すのに用いられているという使い分けがある。平安時代初期の『金光明最勝王経音義』の万葉仮名の使い方によって、当時のアクセントが分かる。

8. 過去のアクセントを反映するもの

これら以外に、過去のアクセントの資料となるものは現在まで伝わっている歌謡や語り物の旋律、その旋律を表す楽譜、またその歌い方・語り方に関する注意を書いた文献である。現在日本で行なわれている歌謡の旋律が、歌詞のアクセントとある程度関係をもって作られていることは、見逃すことのできない事実である。歌謡や語り物の旋律はアクセントの研究上で、補助的な資料となる。

9. 奈良時代のアクセントの研究

以上に述べたような方法で、最近、アクセントについての研究は非常に進んでいる。しかし、そのほとんどは平安時代以降の京都方言アクセントの研究であると言わざるを得ない。ちなみに、平安院政時代については、主に声点でアクセントが記録されている資料を手がかりにした研究がすすめられ、金田一春彦氏、小松英雄氏、桜井茂治氏の分析結果が発表され、この時代のアクセント体系が明らかにされつつある。

続く鎌倉時代は、仏教音楽の旋律とその楽譜を中心とした研究があり、金田一春彦氏の『四座講式の研究』によって、この時代のアクセント体系が再構成されている。

中世でも南北朝時代は、古代アクセントが近代アクセントへ変化を起こす時期である。この時期は藤原定家の仮名遣いからアクセント体系の変化を論じた大野晋氏の『仮名遣いの起源について』などの研究がある。

室町時代から江戸時代にかけては、真言宗の旋律が記録された『論議』『平曲』がおもな資料となる。また、『補忘記』も資料となり、服部四郎氏、金田一春彦氏、桜井茂治氏

の諸論考によって中世アクセント史の流れは解明されようとしている。

このように平安時代以降のアクセント史については研究の展望があるのに対して、奈良時代の日本語のアクセントの研究はどのように展開しているのでしょうか。

先ず認めざるを得ないのは、奈良時代のアクセントを記述、あるいは記載した文献が極めて乏しいことである。実際、唯一の資料は『古事記』の本文の所々に「上」「去」という文字によってアクセントを註記したものだけである。こういうわけで、これまでの研究は二つの点にしぼられている。

- 1) 『古事記』の「上」「去」の四声註記をめぐる研究
- 2) 上代の音韻、特に上代特殊仮名遣いや母音調和とアクセントとの関係を通してのアクセントの推定

『古事記』の「上」「去」の四声註記をめぐる研究は古く、本居宣長によって始められたが、註記の例が少ないため、今でも検討が続けられ、定説がない。焦点が置かれるのは註記の時期、意図と調価である。註記の時期については、『古事記』成立当時のもので、奈良時代のアクセント資料であると推定される。なぜ、この種の註記が付けられたのかということについてはいろいろな説がある。先ず、註記が付けられた言葉のアクセントは、語の結合であって、そのアクセントが基のアクセントと違ったため「上」「去」の字が付けられたのだという説がある。次に、註記が付けられた言葉は、漢字の用法から見て漢字の読みだけを借り、意義を捨てる一種の借訓仮名としての用法であると考え、借訓仮名の訓と、それによって表される語のアクセントとの間にくい違いがある場合に、実際に唱えられる語のアクセントを忘れないために「上」「去」を註記したという説がある。「上」「去」が具体的にどのような調価を表すかについては、また二つの説がある。山田孝雄氏によれば、「上」は上昇調、「去」は下降調を表す。本居宣長、和田実氏等の説によると「上」は高平調、「去」は上昇調を表す。

また、奈良時代の音韻とアクセントとの関係をめぐる研究も行なわれている。この研究においては上代特殊仮名遣いや母音調和とアクセントとの関係が検討される。

現代の日本語には母音が五つあるのだが、上代語はそうではなかったらしい。奈良時代の、万葉仮名で書かれた文献を分析すると、「天」「雨」「亀」「米」などの言葉の「メ」を記すためにはいつも米、迷、梅、毎、妹という万葉仮名の文字が使われ、「恨めし」「召す」「示す」「姫」などの言葉の「メ」を記すのには売、馬、面の字が使われていた。こういう使い分けがかなり守られており、「天」「亀」などの「メ」が、「示す」「召す」の「メ」と違っていたのではないかと推定されている。この二種類の「メ」が橋本進吉氏によって「甲類」と「乙類」と名付けられた。万葉仮名表記を全体的に調べると、甲乙類の使い分けが「メ」という音節だけに関するものではなく、例えば力行にカ/キ乙類・キ

甲類／ク／ケ乙類・ケ甲類／コ乙類・コ甲類の八個の音節が区別されていたということが分かる。つまり、上代語においては、五十音図のイ列・エ列・オ列にそれぞれ「甲類」

「乙類」の二類の区別があったのである（もっと詳しく言えば、甲類・乙類の区別はイ列・

ア	イ		ウ	エ		オ	
カ	キ _甲	キ _乙	ク	ケ _甲	ケ _乙	コ _甲	コ _乙
ガ	ギ _甲	ギ _乙	グ	ゲ _甲	ゲ _乙	ゴ _甲	ゴ _乙
サ	シ		ス	セ		ソ _甲	ソ _乙
ザ	ジ		ズ	ゼ		ゾ _甲	ゾ _乙
タ	チ		ツ	テ		ト _甲	ト _乙
ダ	ヂ		ヅ	デ		ド _甲	ド _乙
ナ	ニ		ヌ	ネ		ノ _甲	ノ _乙
ハ	ヒ _甲	ヒ _乙	フ	ヘ _甲	ヘ _乙	ホ	
バ	ビ _甲	ビ _乙	ブ	ベ _甲	ベ _乙	ボ	
マ	ミ _甲	ミ _乙	ム	メ _甲	メ _乙	モ _甲	モ _乙
ヤ			ユ	(江)		ヨ _甲	ヨ _乙
ラ	リ		ル	レ		ロ _甲	ロ _乙
ワ	ヰ			ヱ		ヲ	

表2.

坂秀世氏は『古事記に於けるモノ仮名の用法について』において、次のような、上代語における音節結合の法則を述べた。

エ列・オ列すべての音節にあるのではなく、キ・ヒ・ミ・ケ・ヘ・メ・コ・ソ・ト・ノ・モ・ヨ・ロ・ギ・ビ・ゲ・ベ・ゴ・ゾ・ドにのみあった一表2。この問題はまず本居宣長が『古事記伝』で論じたのが始めて、橋本進吉氏がこの研究を進め、この甲乙二類の区別が上代の音韻の区別を表していることを確認した。このような当時の音の違いに基づく万葉仮名表記は「上代特殊仮名遣い」と呼ばれる。以上のような音節の甲乙の区別は、上代語を研究する上でも、語源を考える上でも、重要であり、当時の音韻体系の解明において基本条件となる。上代特殊仮名遣いの研究の過程で、語根内に現れる母音の出現のしかたに制約があることが分かってきた。例えば
ko_乙to_乙 (言)、ko_乙ko_乙
ro_乙 (心)、mo_甲mo_甲 (百)、
kumo_甲 (雲)、so_甲ra (空)
fi_甲to_甲 (人)、aki_甲 (秋)
といった例はあるが、co_甲co_乙
co_乙co_甲 といった例はないのである (cはconsonant、つまり子音を表す)。これについては池上禎造氏と有坂秀世氏がほぼ同時に同じような結論に達している。有

第一則、甲類のオ列音と乙類のオ列音とは同一語根（動詞は語幹）内に共存することはない。

第二則、乙類のオ列音はウ列音と同一語根（動詞は語幹）内に共存することは少ない。

第三則、乙類のオ列音はア列音と同一語根（動詞は語幹）内に共存することは少ない。

奈良時代の日本語の音節結合の法則は、いわゆる母音調和の名残ではないかと推定されている。母音調和というのは、アルタイ語やウラル語に広く見られる音韻上の現象である。これらの言語においては母音の数がわりあい多く、7・8個あるが、これらの母音が陽性と陰性の二つの系列に分かれ、複数音節からなる語幹内には陽性母音と陰性母音とが共存することがなく、必ず陽性母音どうし、または陰制性母音どうしで結合している。

上代のアクセント史料の乏しさを補う方法として、音韻とアクセントの関係を手掛かりとして研究をすすめる方法がある。その一つは上代特殊仮名遣いとアクセントの関係で、大野晋氏は五十音図のイ列乙類とエ列乙類の音節が平安時代のアクセントを註記した資料では低平型のものが圧倒的に多いという分析結果を発表した。さらに桜井茂治氏は八世紀の日本語に見られる母音調和の語例を取り出し、それぞれの語例が十二世紀のアクセントの資料ではどのようなアクセント型をしているかを調べた。その結果、母音調和の語例は十二世紀の文献においてほとんど○○、あるいは●●、つまり全平型であるという結果が出た。こうして母音調和を起こす語は、全平型のアクセントと積極的に結び付いているということが明らかとなった。桜井氏の研究の結果、奈良時代のアクセント体系と平安時代の体系とはほぼ同じものであったと推定される。桜井氏が推定した奈良時代のアクセント体系は『古事記』のアクセント註記と一致するので、桜井氏の仮説はかなり確実であると言える。これらの研究は、古い日本語の音韻の音価とその高低との密接な関係を指摘したもので、資料の乏しい奈良時代の日本語のアクセントの研究に大きく寄与している。

10. アクセントの史的変化の研究成果

アクセントの研究によって明らかになったのは次のようなことである。

アクセントの〈体系的変化〉は、単語ごとに、ばらばらに起こるのではなく、音の数、拍数を同じくする品詞、単語、文節を含むグループを単位にして起こる性質がある。このグループを〈類〉と呼ぶ。この類がどのようにして出来たのか、今のところ不明であるが、八世紀頃には、すでに存在していたと見られている。日本祖語のアクセントやその成立については不明な点も多いが、八世紀以降の奈良・京都を中心にした近畿方言のアクセントの変遷については、かなり明らかになっている。

アクセントの史的変遷は、大きく「古代アクセント」「中世アクセント」「近代アクセント」の三つに区分出来る。

「古代アクセント」は、奈良時代から鎌倉時代までのアクセントである。語ごとにアクセントが独立しており、助詞や助動詞の一部も単独のアクセントを持っていた。また、名詞・動詞・形容詞の語頭や語末、そして助詞などの一部に、「上昇調」や「下降調」という高低の配置がみられるのも、この時期の特色である。この時期は特に大きな体系的変化はない。

「中世アクセント」は、南北朝時代から江戸時代初期までで、「古代アクセント」が「近代アクセント」に移っていく体系的変化の見られる時期のアクセントである。

助詞や助動詞も自立語と結合してアクセントを作り、語頭や語末にあった「上昇調」や「下降調」も大部分は消滅した。この時期、三段階の体系的変化が起こり、「古代アクセント」は「近代アクセント」へ移っていった。

「近代アクセント」は、江戸時代後期に成立し、中世における体系的変化を経て、現在の近畿地方のアクセント体系になっている。

参考文献：

- 金田一春彦等 『日本語百科大事典』 大修館書店 1988年。
 桜井茂治 『古代国語アクセント史論考』 桜楓社 1975年。
 和田実 「古事記の声の注」 『国語と国文学』 9月号 昭和27。
 金田一春彦 『国語アクセントの史的研究 原理と方法』 塙書房 1974年。